

## 一神教間の基本的な教えの類似と相違（1） —— 創造論と終末論 ——



## 創造論

- 創造者なる神への信仰
- 三つの一神教の大前提
- ヘブライ語聖書「創世記」1:1-2:4a
- 「初めに、神は天地を創造された。（中略）第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。これが天地創造の由来である。」

## イスラームにおける天地創造

- 「六日で天と地を創造し、やおら玉座に腰おろし給うたのもこのお方。地に浸み込むもの、地から湧き出すもの、天から降るもの、天に昇り行くもの、すべてを知り給う。お前たち、どこにいようと必ず側にいらっしゃる。お前たちのすることを全部見ていらっしゃる。」（Q57:4）
- 創世記では天地創造の後、神が安息（休息）したとなっているが、イスラームでは、世界を常時維持しているアッラーが休息するのは論理的にありえないとし、聖書編集者が本来の啓示を改ざんしたとして批判する。

## 創造された世界とそこからの離反 （ヘブライ語聖書）

- 神による天地創造
- 失楽園の物語
- 生活・労働の苦悩の原因譚



ジョン・ミルトン『失楽園』（1667）  
の挿絵（W.ブレイク、1808）

神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する。」

神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い、取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は茨とあざみを生えいさせせる。野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に戻る時まで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に戻る。」

（創世記 3:16-19）

## 人間の罪

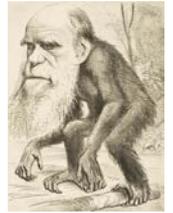
- ユダヤ教：多様な罪理解
- 「その日には、人々はもはや言わない。「先祖が酸いぶどうを食べれば、子孫の歯が浮く」と。人は自分の罪のゆえに死ぬ。だれでも酸いぶどうを食べれば、自分の歯が浮く。」（エレミヤ書31:29-30）
- キリスト教：アウグスティヌス以降、「**原罪**」が支配的に
- イスラーム：原罪を認めない

## 「秩序」からの逸脱

- カインとアベル（創世記4章）
  - 殺人の原因譚
- ノアの洪水（創世記6-9章）
  - 自然災害の原因譚
- バベルの塔（創世記11章）
  - 言語の違いの原因譚

## 創造物語と進化論論争

- チャールズ・ダーウィン『種の起源』（1859年）が論争のきっかけ
- 生命の多様性をどのように説明することができるのか
- 創造論者：神がすべての生命種を創造
- 進化論者：神を前提としない
- イスラーム圏では、進化論はほとんど普及していない。



ダーウィンを揶揄する風刺画（1871）

## 終末論

- 終末論の起源
  - 反コスモス的な「移動」（救済・脱出）の欲求
- グノーシス主義において
  - 「この世」→「天上世界」（空間的な移動）
- 黙示文学において
  - 「古い世」→「新しい世」（時間的な移動）

## 終末論の類型

- 個人的終末論
  - 来世、永遠の命
- 宇宙論的終末論
  - 歴史の終わり、最後の審判



ミケランジェロ「最後の審判」（1536-41、システリーナ礼拝堂）

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。

（ヨハネ黙示録 21:1-2）

## 抵抗文学としての黙示文学

- ダニエル書（ヘブライ語聖書）
- マカベア時代（前2世紀中頃）のアンティオコス4世エピファネスの迫害下で書かれる。
- ヨハネ黙示録（新約聖書）
  - ローマ帝国の迫害下で書かれる。

## 歴史観

- 一神教の終末論が前提とする歴史観
- 直線的で一回限りの歴史
- キリスト教：上昇史観
- イスラーム：下降史観
- 一神教以外の宗教・文化が前提とする歴史観
- 循環的な歴史観が多い

## イスラームの終末論

- イスラームはユダヤ教・キリスト教の終末論の基本構造を踏襲
- 「言ってやるがよい、「(審判の日には) 神様がみんな一緒にお召しになって、立派に黒白をつけてくださる。(アッラーこそ) 真の裁判官、何から何まで御存知のお方」と。」(Q34:26)

## 来世観

- ヘブライ語聖書：「来世」に、ほとんど関心を示さない。
- キリスト教：天国（楽園）、地獄
- カトリックでは12世紀以降「煉獄」も。
- イスラーム：楽園と火獄（「来世」は六信の一つ）
- クルアーンの記述は感覚的かつ具体的（楽園は、川・泉・おいしい食べ物・美酒・美女等のイメージで語られる）。



## 【参考文献】

- ヨアヒム・グルニカ（矢内義頭訳）『聖書とコーラン——どこが同じで、どこが違うか』教文館、2012年。
- 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社、2001年。
- 池内 恵『現代アラブの社会思想——終末論とイスラーム主義』講談社、2002年。